



un film de **SERGE GAINSBOURG**
JANE BIRKIN dans

je t'aime moi non plus



ジュー・テ・シ・エフ・ワ・リ・ヴ・リュ

「俺もそうじゃない」

監督・脚本・音楽：セルジュ・ゲンスブール 主演：ジェーン・バーキン

Krassky: JOE DALLESSANDRO

Padovan: HUGUES QUESTER

Johnny: JANE BIRKIN

Boris: RENÉ KOLLDEHOFF

GERARD DEPARDIEU

NA NA

scénario, musique: **SERGE GAINSBOURG**

1976/France/couleur/europe vista/90 min.
BANDE ORIGINALE DU FILM « je t'aime moi non plus » (MERCURY M.E.)

Ce film est offert par

IÉNA



je t'aime moi non plus

ジュ・テーム・モフ・ノン・プリュ

1976年/フランス映画/カラー

オリジナル・サウンドトラック:「ジュ・テーム・モフ・ノン・プリュ」(マーキュリー・ME)
配給:デラ・コーポレーション

協賛: I ÉNA

「ゲンスブールについての1/2ダース」***川勝正幸

[1]V・バラディの6年ぶりの主演映画のタイトルは、セルジュ・ゲンスブール(1928~91)の69年の作品「エリザ」からの引用で、エンディングには彼の歌が流れる。K・カリヤやM・オールドランド……はゲンスブールをカバーし、テラ・ソウルやマッシュヴ・アタック……はブレイク・ビーツに使う。昔はバルドー、パーキン、ドヌーブ……の恋人として有名だったが、ここ数年、彼が彼女たちの「トータルなプロデューサー」であったことや、B・ヴィアンの異端のシャンソンがきっかけで音楽の道へ入り、以後、ジャズ→アフロ・キューバン→ロック→レゲエ→ラップ……と旬のJズムにいち早く手をつけた「ビートのプレイボーイ」だったことに、僕らはようやく気づき始めた。ところが、映画監督としての再評価は昨年パリで全シナリオ集(監督作品4本+未映画化脚本2本)が出版されたものの、まだまだ。[2]「ジュ・テーム・モフ・ノン・プリュ」はゲンスブールの処女監督作品で(彼の師匠だったヴィアンに捧げられている)、題の意味は「愛してる、俺もそうじゃない」。もちろん、「肉体の愛は出口なし」と歌われるジーン&セルジュのメイクラヴ・ソングと同タイトル。しかし、映画は? [3]舞台は、アメリカの片田舎にありそうなダイナー。登場人物は、そこで働く男の子のような女の子ジョニー(パーキン)。哀しい瞳をしたゲイのポーランド人クラスキー(A・ウォーホル映画の常連! J・ダレッサンドロ)、彼は教養を隠してヤクザなトラックの運転手をしている。パドヴァン(H・ケステル)はクラスキーを兄貴♥と慕うゲイのイタリア人、いつもライナスの毛布のように武器替わり(?)のビニール袋を持っている。そしてジョニーは、退屈な日常にふらりと現れたクラスキーと恋に落ちる。男と女のセックスができない彼にお尻を差し出したいけなジョニー。そして、2人の仲に嫉妬するパドヴァンの怒りが爆発して……。[4]76年当時は、フランスでは悪評9対好評1(トリュフォー他)。ゲイ2人と両性具有的な女の子との三角関係、アナルセックス……とスカンダラスな面ばかりが強調され、愛がなくて生きていけない、哀しい(だから、素晴らしい)人間たちの姿を描いたことは無視された。いざメイク・ラヴとなるとジョニーが痛がって大声を上げるので、必ず邪魔が入ってなかなかできない……といった毒のあるユーモアも理解されなかった。[5]今の視点で見ればアメリカン・ニュー・シネマへのフランス人ゲンスブールからの解答。ドイツ人ヴェンダースによるロード・ムービー「パリ、テキサス」(84)の先駆的作品とも言える。フランス・ロケでありながらアメリカ系の風景の切り取り方は鋭く、その絵作りはまっとうである。[6]「ジュ・テーム・モフ・ノン・プリュ」はゲンスブールしか撮れなかった映画だが、もしゲンスブールの作品でなければもっと早く評価されていたに違いない。

「パリのジキルとハイドが撮った映画」***カヒミ・カリイ

[FLYER #2 BIRKIN ISSUEから、つづく] 彼は、自分を否定する事によって最大の力を発揮するタイプというか……。例えば、彼はユダヤの血が流れていて子供の頃胸に黄色い星のバッジをつけさせられていた事や、耳はでかく鼻はワシ鼻、目はぎよる目……なんていうルックスにコンプレックスを持っていた事。不精ヒゲは実は30過ぎまで生きてこなかったヒゲに対する裏返し、本当は絵かきとして認められたかったのに、3分で作った曲ほど評判になったりと……。彼は「私はすべての事に成功した、自分の人生以外は……」なんていうような事を言っていたのです。

彼はゲンスブールとゲンスブールという2つの顔を持っている、この映画自体は、すごく「ゲンスブール」なだけで、このキャラクター 1人1人はすごく「ゲンスブール」だといった感じ。ジキルとハイドみたい!

私がなぜゲンスブールを、こんなに好きになったのかというと(よくインタビューで、とっさにこの質問をされると、まったく答えられなくなって困るのですが…)、結局ゲンスブールのそういう所に魅かれているんだと思う。私が彼を知ったきっかけは、たまたまラジオから流れてきた彼の曲が気になったのが最初なので、その時はもちろん彼のキャラクターなんて全然知らなかった訳で、だから基本的には彼のメロディーに魅かれたというのが一番なのだと思うのですが(私は彼のファンである前に彼の作品のファンだと思う)、でもきっと私のアンテナが、彼のメロディーの中に、そこらへんをキャッチしたというか、実は、最初から私はセルジュの匂いをかぎとってたのかもね!! (私のアンテナは、鋭い!)

ゲンスブールについて全く知識のない人がこの映画を観たらどんな風なのかな……。私はこの映画は、一般受けするようなものではないと思うのですが、ある人にとっては、ものすごく印象的な映画になるのではないかと思います。そう! 私のアンテナみたいに! もしそういう人がいたら、ゲンスブールの曲を聞いてみる事をお勧めします。多分、ぶっこんでしまうでしょう。(ああ、これから、そういうことを経験する人がいるなんて、なんだからうらやましい……。) 私みたいにね!! [おしまい]



10月下旬よりレイトショー!

(ただし、毎日曜日は休映致します。)

※特別鑑賞券 ¥1,300

(当日一般¥1,600/学生¥1,400) 発売中

●劇場窓口、エストIPG、チケットセゾン、チケットぴあにてお求め下さい。

梅田ロフトB1

06

テアトル梅田

(359)
1080